

## アトモスフィア

中国（桂林市）で感激したこと  
—「アレッ、誰も寝ていない！」—

鏡山博行\*

先日、中日ビタミン学会議で桂林へ行く機会を持った。有名な観光地である。研究発表、座長の役ともに初日の午前中に終るという幸運に恵まれ、少々後ろめたさを感じながらも十二分に観光を楽しませてもらった。知り合いの桂林医学院 Zheng 教授に何かと面倒見ていただいたお陰で効率よく動きまわることができたが、見返りに桂林医学院3年生へのレクチャーを依頼された。準備する暇がなければ自分が通訳するから日本語でもよいとのことだったので引き受けたが、日曜日の夜8時からという。「学生さん集まるの?」「大丈夫、みんな楽しみにしているから。」とのこと。「学生も気の毒に」とつぶやきながら半信半疑で出掛けた。

講堂に足を踏み入れて目を見張った。二百名定員の講堂が満員で外にもかなりの数の学生が溢れている。当夜は雨も激しく、しかも明日は試験が予定されているときいた。コンピュータのトラブルもあって20分程開始が遅れたが、騒ぐことなく大人しく待ってくれた。一時間余りとりのめない話をしたが、通訳してもらっている間、全体をゆっくり眺め渡す余裕ができる。居眠りをしている学生が一人もいないのに先ずは感激。しかもみんなの目が生きている。習っている知識のレベルは日本の学生にくらべるとかなり低いという印象であったが、生き生きとした眼差しで終始迫ってくる雰囲気の中で話し終えることができた。その後、質問の時間になったが、次々に手が挙がるのに再度感激。中には「日本で学位を得るのに金銭的にどれくらいかかるか」といった類の質問もあったが、20名近くの質問に対応し、こちらが「もう止めようや」といいたくなくなったくらいである。終わったのは10時半を過ぎていた。花束を贈られ、拍手で送り出してもらったが、これほど話し甲斐があったという経験は思い出さることができない。

どうしてもこれが日本でだったらどうであろうかと考えざるを得ない。「講義、授業が面白くないから勉強する気にならない。」という学生の声、「学生に勉強意欲を引き起こすような講義、授業をしなければならぬ。」との教育専門家からの声大きい昨今である。「そんなものではないでしょう。講義がつまらないから勉強しないなんておかしいとは思いませんか。」といいながら20年余り教壇に立って来た筆者にとって、授業を終えてこんなに充実感を感じることができたのは恥ずかしながらはじめてといえる。

桂林は上海や北京とくらべると「地方」である。外国からの学者の話しを聞く機会があまりないという事情があるかもしれない。それでは、日本で同じような状況にある「地方」の大学を仮定したとして、著名なノーベル賞学者のレクチャーをするから日曜日の夜8時に大学へ来いといって、どれくらいの学生が出て来るだろうか。ましてや翌日試験となるとほとんど誰も出て来ないのではないだろうか。嫌々出て来ても一人も居眠りをしないで話を聞いてくれることなど考えられない。「今日のレクチャーにくらべれば日本では格段に良い授業をしている。授業にどんなに工夫をこらしても居眠りをする学生を無くすことができないで苦労している。この違いは何なのか?」お世辞にもきれいとは言えない講堂ではあったが、活気に溢れた桂林の医学生を前にして、清潔で便利で豊かなキャンパス環境の中で、授業になると生気を失ったようになる日本の医学生を思い浮かべながら、この違いはどこから来るのか考えざると得なかった。ハングリー精神の問題か? 使命感の問題か? 明治初期の日本の医学校では、大学では、学生がみんな外国人教師の授業に必死にくらいついたと聞いている。目の前の桂林の医学生を見ながら、フトそんなことを思い浮かべていた。

大分昔になるが、上海医科大学のゲストハウスに泊めてもらったことがあるが、朝7時に図書館が学生で満員になっているのに驚いたことがある。中国からの留学生が「日本の学生が勉強しないのに驚いた」と述べている記事を読んだことがある。授業で習っている知識は量質ともに日本の医学生にくらべると乏しいかもしれないが、「求めよう」とするこの姿勢は決して作られたものではないと感じ、「負けたなあ」との気持ちを未だ消すことができない。

\*大阪医科大学名誉教授、本会名誉会員